

本研究は青森市で開催される青森ねぶた祭にて制作される「青森ねぶた」の造形的変遷とその背景について考察を行ったものである。ねぶたとは針金と角材による立体的な骨組みに和紙を貼り、墨とロウで書割りと模様描きを施し、染料や水性顔料で彩色したものを、内部から照明を当てて光を灯す立体造形物である。毎年ねぶた師と呼ばれる職人の手により作り変えられ、日本や中国の史実、伝説を表現した勇壮華麗な武者人形を表現することが多い。本研究では2016年に発行された青森ねぶた祭の研究論文を集約した『青森ねぶた誌 増補版』における一部の先行研究を引用しつつ、自身の手元にある膨大な写真資料群を分析した統計の数値を織り交ぜ、考察を重ねた。

江戸時代では七夕祭りの性格から角灯籠であったものが、徐々に手の込んだ人形灯籠へと移り変わった。明治から昭和にかけては電線配備など都市近代化の影響を受け、サイズの縮小が図られた。戦後には担ぎねぶたから台車に載せ曳く形態に変化し、国道整備の影響下で横に幅広い台車形態に落ち着いた。素材は竹から針金へ、蠟燭から電球へと技術革新が起こり、より湾曲表現が可能となる。その結果、自然景物の表現や人体の表現が発展する。

戦前の青森ねぶたは一貫して日本の史実・伝説または芝居演目を題材としたものが主流で、必要最低限の登場人物が基本的に1~2体据え置かれるものであった。昭和時代初期の担ぎねぶたでは、高欄上の空間が縦長ということもあり人形の多くが起立した姿勢で正面を向く形式をとっていた。二輪台車の形態をとってからは台車が横に長いものとなり、人形も合わせて肥大化、立ち膝姿勢へと変わっていった。昭和30年代以降には、横に広い空間を最大限に生かす構図が次々と開拓されるものの、大半は人形同士の組み合わせに主眼が置かれたものであった。題材観にも変化があり、神話や神仏を表現したもの、地元青森の伝説を表現したものが登場した。平成時代に入るとモチーフ数は増加する傾向にあり、併せて装飾物も多く取り入れられるようになる。照明にLED電球が使用され全体的にねぶたは明るいものへ変貌を遂げる。題材もその幅を広げ、近年は文化・信仰を取り上げたものが評価を受けている。戦前の「合戦・芝居」の題材観は一変し、民衆の生活に目を向けるものが登場するまでに至っている。

以上のように、青森ねぶたの台車形態や造形の特徴、表現される題材観は、各時代の世相や社会背景を反映し、現在にまで発展を遂げている。2018年現在には、さらに新たな視覚資料が発見されている。今後も引き続き、新資料の発見の度に、考察を重ねていくつもりである。